

石川達三論

——戦時体制下の文学者——

都 築 久 義

戦時体制下の文学と文学者とを論ずる場合、当時の苛烈をきわめた言論、思想統制とその弾圧政策への言及が、必須不可欠の要件であることには、誰しも異論の余地は存しないところである。

もともと「国体ヲ変革シ又ハ私有財産ヲ否認スルコトヲ目的」とする結社及び運動を禁止した治安維持法によって、具体的には天皇制と資本主義否定、即ち共産主義についての論議が事実上封じられていたうえに、戦争という国民世論の統一を絶対条件とする事態に遭遇して政府指導者が一切の言論を戦争推進に向けようとしたのだから、当時は国民の側からすれば、戦争体制を翼賛する「自由」を除いては全く言論、表現の「自由」は、存在しなかったといっても過言ではなかった。

しかし、私達がこの問題を考える際に留意しなければならないのは第一に、私達が一定の国家や組織に属し、その構成員たるを認めるな

らば、無制限、無限定の言論、思想の表現の自由はありえないこと、逆に言えばそれは常に相対的でしかないことと、第二は、たしかに当時の言論統制は苛酷ではあったけれども、当時台頭した民族主義思想は多くの国民の共感を得たことと同時にそれもまた一つの言論であり思想であるということである。私達が一般に言論、表現の自由の圧迫に抗議するときは、とりわけ戦時体制下のそれを論難する場合には、言論や表現の自由とはそもそもその体制、制度の問題でしかないのにもかかわらず、しばしば内容の価値観によって、それを行なってきたものではなからうか。

別言すれば、あの当時、戦争に反対したり、所謂自由主義的発想に基づくさまざまな言説を主張することも、一つの言論であり、意見であるが、民族主義的側面からの主張や見解を發表し、それを推進することも、同時に一つの言論である、それ故、言論、思想、表現の自由という制度上の見地からいえば、それ等はいずれも等価であることを、見落してはならないということである。

さらに肝要なことは、昭和初期において、多数の知的青年やインテ

リゲンチャがマルクス主義に興奮し、狂喜したように、あの戦時下知的青年やインテリゲンチャを含む大多数の国民が、国家民族の危急存亡を意識し、民族主義的主張に耳を傾け、狂喜し、興奮したのも、前者が、自発的であったと同じように、後者もまた、決して政府・権力の指導や弾圧に屈服したというだけのものではなかった点も、戦時下の「言論弾圧」を考える際に、はつきりと銘記しておかねばならない。

「ヒューマニスティックな、健康な常識と社会正義の感覚から、作者はそのころへ表現の自由Vの限界ぎりぎりまで抵抗していたのだ。」^{注1}とまで評価される「生きてゐる兵隊」の筆禍事件と作者石川達三の戦中、戦後の生きざを、ここでは右に述べたことを視座に入れて、考察してみたいと思う。

周知のように、「生きてゐる兵隊」筆禍事件というのは、石川達三が『中央公論』昭和十三年三月号に同名の小説を発表し、それが新聞紙法違反に問われ、同誌が発売禁止処分を受けた事件である。

単に発禁処分を受けたにとどまっていたのなら、ありふれた事件であつたが、今回はそうした行政処分だけでなく、執筆者、編集者、発行者に刑事処分が及んだところに、この種の事件としては異例なものとなつた。

三年間の執行猶予つきではあるものの、執筆者石川達三、編集責任者兩宮庸蔵、発行責任者牧野建夫は起訴され、判決の結果、石川と兩宮が禁錮四ヶ月、牧野が罰金百円の刑を言い渡されたのである。

これまで発禁の対象となるのは、出版法や、新聞紙法に規定された

「安寧秩序を妨害しまたは風俗を壊乱する文書、凶書の出版」という条項にそつて解釈され、実際には反体制、反道徳的のものや愛欲描写に関するものが多かった。

ところが、「生きてゐる兵隊」については、「皇軍兵士ノ非戦闘員ノ殺戮、掠奪、軍規弛緩ノ状況ヲ記述シタ」ことが「安寧秩序ヲ紊乱」したというのであつた。

明らかに「支那事変」勃発にともない、深化の度をはやめた戦時体制強化の、小説家としての最初の「犠牲」であり、権力の側からすれば先制の一撃を放つたといえよう。

しかし、石川達三にとっていちばんの衝撃は、「この作品によって刑罰を受けるなどは予想もし得なかつた。」ことが現実起きてしまったということである。「ただ私としては、あるがままの戦争の姿を知らせることによつて、勝利に傲つた銃後の人々に大きな反省を求めようというつもりであつたが、このような私の意図は葬られ」てしまい、「若気の至りであつたかも知れない。」(河出書房版「誌」とはいえ、石川達三の熱意と真意は誤解され、結果が見事に裏目に出たことが、彼にとつてはこのうえない悲劇となつたのである。

というのは、社会主義文学では、もともと、権力と対峙することを前提としているため、削除、訂正はむろん、発禁処分や時には検挙さえも予期して書くし、弾圧を憂むることそのものが彼等のヒロイズムを満足させ、出版、ジャーナリズムもそれを宣伝に利用する状況さえうかがわれたけれども、石川達三の場合は事情を異にし、彼の意図は全く別のところにあつたからである。

周知のごとく、「支那事変」開始直後の文壇を席捲したのは、現地報告、従軍記、ルポルターシュであった。『中央公論』、『日本評論』、『文芸春秋』、『改造』などの主要雑誌は十二年八月末から九月にかけて、「支那事変」の現地に文学者を派遣した。その他の新聞社や雑誌も同様の企画を実行したために、一カ月後の雑誌や新聞は彼等の報告が誌・紙面を飾り、競ってそれらを掲載したのである。そして、翌十三年には、この盛況に気をよくした内閣情報部は、当局自らが主宰して文学者を「支那」に赴かせた。

さすがにこのときには、文壇にさまざまな反響をまき起こしたが、結果的には従軍ルポルターシュはますます盛行した。この事情を同時代の板垣直子は次のように語っている。

一般文学が（略）新しい視野と素材をえて上昇する時期を背景にして、当時、ペン部隊などに作家が加わることは、彼の文学者としての生涯に洋々たる未来を約束する如くみえたものである。しかし、今日になってみれば事実は決してそうっていない。

が、ペン部隊や雑誌社の特派が刺激を与えて、一般に作家達が満州や支那に視察に行く風潮が俄かに生じたのである。旅行の目的は勿論できるならば書くためである。時勢に取り残されぬ文壇的地位をそれによって幾分補っておきたいためであった。実質的に視野を拡めておいて、作家たるの基礎を実際に養っておきたいという希望も勿論動機となっている。

右の文章は『現代日本の戦争文学』（六興出版部・昭18・5）から引用した。板垣は女性の眼から鋭く、文学者心理を見抜いているところが興味深い。

こうした当時の文壇情勢と文壇心理を考慮に入れて、石川達三の従軍について、それにかかわった畑中繁雄の回想^{註2}を聞いてみる。

当時、「戦争に関する報道は全て戦争を聖戦と肯定したもので、ゆがめられた報道であった。私は、真実はもっと別のところに隠されているのではないかと考えて」（前誌・註『週刊現代』）、みずから現地従軍を希望していた、という石川氏のその希望をいち早く知って、この人気作家を自社特派員の名目で現地におくりおきからの、南京攻略戦に従軍させることに成功して、この野心作をえたのであるから、これは編集部にとって当時快心の成果にはちがいがなかった。それだけにまた、発表後の成功にはやるあまり、その後の処分にいくぶん慎重さを欠いたこともあながち呑みえぬところであった。しかしその多少予感された危険をおかしてまでなお掲載に踏みきった私どもの心理のうちには、「著れる戦争遂行者への日ごろの憤りや」「いわれなき」戦争への私どもの不満が微妙に作用したことも事実であった。

畑中の記述には幾分戦後的ニュアンスは免れないし、彼の引いている石川達三の『週刊現代』（昭36・9・24）の発言は、とりわけそのことが顕著であるのはやむをえないにしても、ここで注目したいのは

やはり彼が「現地従軍を希望していた。」のであり、「自社特派員の名目で現地におくった。」ということである。

文壇でルポルタージュ文学が流行し、現地報告が時の話題を独占している状態を前にして、「現地従軍」を自ら希望して出発したところに、野心家石川達三の面目躍如たるものがある。

「蒼氓」、「日蔭の村」と問題作をてがけたルポルタージュ作家が眼前の戦争という好個な素材を黙過するはずもなかったし、先行する従軍記が、いずれも素朴な感慨や戦争への決意表明の表白にすぎないことに、彼はどれほど歯ざしりをし、かつまた不敵な笑いを浮かべたことであろう。

△俺の書く従軍記はちがう。▽と、秘かに野望を抱いて現地へ向かった石川達三を想像するのは困難ではない。ひとわたり第一陣の従軍ルポルタージュが出そろった十二年十二月中旬、彼は南京陥落の提灯行列を後にして「支那」へ渡った。滞在一カ月余して帰国。「原稿は昭和十三年二月一日から書きはじめ、紀元節の未明に脱稿した。その十日間は文字通り夜の目も寝ずに、眼のさめている間は机に坐りつづけて三百三十枚書き終った」(前出「誌」)のであった。『中央公論』の発売は二月一九日、その前日、三月号の発売禁止の通告を受ける。数日後、執筆者と発行者の取調べがあり、起訴された。第一審の判決は九月五日に前述のごとくとなったのである。

既述の彼の衝撃が大きく、彼の悲嘆が痛切であったのは、かような彼の意図と熱意が裏目に出してしまったからに他ならない。ありふれた発禁処分程度ならまだしも、彼は刑事処分まで課せられた。「お前も

とうとう前科一犯の男の女房になるんだな」と、『結婚の生感』(昭13・11)にこのときの心境を記す石川達三の悲痛はよくそれを物語っている。

実際のところ、石川達三の「生きてある兵隊」執筆の動機と意図には、反戦や反軍的姿勢は全くなく、逆に文壇的野望はともかく、彼の憂国の至情と戦勝への不拔の信念が、横溢し、むしろ褒賞すべきものであった。

すくなくとも、裁判記録にみる彼の陳述と応答のなかには、それが判然とうかがえる。

久保田正文^注によると「八田(判事)が△被告ハ予テヨリ戦場ニ派遣サレタイ希望ガアッタ▽というが、それはどういう理由からかと質問したのに対して、石川はこうこたえた。△小説ヲ書ク為メ▽であるが同時に」

新聞等サヘモ都合ノ良イ事件ハ書キ真実ヲ報道シテ居ナイノテ国民力暢氣ナ気分テ居ル事カ自分ハ不満テシタノ国民ハ出征兵士ヲ神様ノ様ニ思ヒ我軍カ占領シタ土地ニハ忽チニシテ樂土ガ建設サレ支那民衆モ之ニ協力シテ居ルカノ如ク考ヘテ居ルカ戦争トハ左様ナ長閑ナモノテ無ク戦争ト謂フモノノ真実ヲ国民ニ知ラセル事カ真ニ非常時ヲ認識セシメ此ノ時局ニ対シテ確乎タル態度ヲ採ラシムル為メニ本當ニ必要タト信シテ居リマシタノ殊ニ南京陥落ノ際ハ提灯行列ヲヤリ御祭り騒ヲシテ居タノテ憤慨ニ堪エマセンテシタ

さらに、判事が、こういうことを書けば「日本軍人ニ対スル信頼ヲ傷付ケル結果ニナラヌカ」と問うと、彼はこう答えている。

ソレヲ傷付ケ様ト思ツタノテス大体国民カ出征兵ヲ神ノ如クニ考ヘテ居ルノカ間違ヒテモツト本当ノ人間ノ姿ヲ見其信頼ヲ打チ立テナケレハ駄目タト考ヘテ居リマシタノテ其誤ツタ考ヘヨ打破シヤウト思ツタノテス

断るまでもなく、この陳述は統後国民の浮薄な做りへの激怒であり暢気な国民への警鐘であり、いまだ非常時を認識せざる国民に対して覚醒を促し、決起を絶叫したものである。

にもかかわらず、彼の真意は理解されなかった。「安寧秩序を紊す」といつて当局の忌憚にふれ、チェックされたのは九カ所である。

再度、該当部分を久保田正文より借用する。

作品内容の訊問に入つて、判事は占領放火の場、老姿から牛を奪う場、など不法、残虐の場面、九ヶ所をひとつひとつずつあげて確認している。(判決記録においてはそれが整理され、五章の平尾と近藤が、母親の死を哀しんでいる姑娘の声をききつけて殺すまでの場面、六章の盃一杯の砂糖を盗んだ中国人の忠実な人夫を武井上等兵が殺す場面、三章のはじめ北支と南支での略奪方式の相違する記述部分、五章の笠原伍長が凌辱したうえ殺した中国女性から奪ってきた指輪を倉田少尉がみつめて、おれもひとつ記念

にほしいと言っている場面の四ヶ所に要約されている。)

たしかにこれを一読しただけでも、「生きてある兵隊」に描出された「皇軍」の残虐・不法ぶりがいかにすさまじいかは推察できる。そのことによって、「皇軍の威信」は傷つけられ、ひいては国民の戦意喪失を招く危惧はあるかもしれない。

しかし、もう一つ気がつくことは実はこの「皇軍」の蛮行の対象が敵国「支那人」に対してであつて、「皇軍」内部の不法・残虐ぶりの暴露ではない、ということである。

「皇軍」内部の非人道的な残虐・不法を意識的にか、無意識的にか黙殺する姿勢に、すでに「真実ヲ報道」していないし、兵士の「本当ノ姿」や「戦争ト謂フモノノ真実ヲ国民ニ知ラセ」てはいない。が、それもさることながら、いったい戦争のさなかに、自軍が敵国の人間に対して敢行する残虐・不法な行為を描破することが、はたして「安寧秩序を紊し」かつ「皇軍」を傷つけ、それが戦意昂揚の妨げになるのであろうか。

たとえば、双方が興奮して激闘しているときに、味方の自軍が敵方に向けていかなる残虐で残酷な仕方で応戦し、戦おうとも、それによつて敵のぶざまな敗況に喝采をおくり、敵意をますますかきたてられいやがうえにも戦意が鼓舞されることはあったとしても、その反対になることはまずありえない。

そうだとすれば、「生きてある兵隊」で、作者がもっぱら敵対国の「支那人」に対して敢行した残虐・不法な行為のみを点描し強調した

この意味と、それが与える影響と波及効果は、作者の意図がどうあれ、およそ想像がつこう。

そして、そのような観点に立てば、「殊に外国で翻訳され悪用された……」（「結婚の生感」という懸念はあるとしても、銃後国民に対しては、「安寧秩序を紊し」「皇軍」の威信を傷つけ、それが国民の戦意喪失につながることはなかったのではないか。端的に言えば、かえって、戦意と士気は昂められたのではないかと私は思う。

というのは、「大東亜戦争」当時の大本営発表や新聞、その他の報道記事が、目をおおうばかりの「皇軍」兵士の殺戮の模様を誇大宣伝し、伝えているのは、それによって銃後国民の戦闘意欲を燃やし、戦意を生起せしめようと意図したことが明白であるし、またその効果も少くはなかったからである。

ちなみに、たまたま手許にある『読売新聞』（復刻版）から、見出しのいくつかを拾ってみる。

米鬼を粉碎すべし 武器なきは竹槍にし

必殺の雷撃拳る水柱

敵自動車殲滅、来る奴来る奴を叩斬る

米鬼討滅の火花

討滅さん米鬼英畜

この見出しに続く記事に、その対象が「非戦闘員」であるか否かを格別配慮した気配はうかがえない。だいたい、「米鬼」や「英畜」と言うときに、「戦闘員」という限定つきで考える者もないし、なによりも無差別殺戮を不可避とする爆弾戦争においては、そうした発想は不可能でもあるし、無意味である。

要するに、大本営発表や新聞、その他の報道は、「皇軍」がいかに勇敢に戦い、戦果をあげているか、逆に言えば敵がいかに惨じめな状況であるかに焦点をしばり、これでもか、これでもかといわんばかりに書きたてたのである。

この姿勢と発想こそ「生きてゐる兵隊」と軌を一にするものでありそこに誇張があるのみならず、「皇軍」内部の腐敗や非人道的残虐・不法を隠蔽した筆法も、そのまま大本営発表に通ずるものがある。

畢竟、「生きてゐる兵隊」は「支那事変」版の大本営発表であったといえるのだが、少しくはやく発表してしまつたがために、「悪用」を憂慮されて、処罰を甘受しなければならぬ「不運」にみまわれたのは、この時点では石川達三にとって、全く「不幸」だったとしか言いようがあるまい。

二

「生きてゐる兵隊」に活写された日本軍の残虐・不法行為は、大本営発表の先取りであり、その姿勢と視点は、大本営発表とその統制下における新聞、その他の報道と同一のものであることを、前章で述べ

た。

それとちやうど裏腹の関係にあるのだが、この小説を一読してすぐに感知できるのは、日本軍の残酷極まりない行動は、如実に生々しく描写されながら、この小説にはほとんどそれをされる側、つまり、「支那人」に対して作者の目が向けられていないということである。本多勝一流に言えば、殺す側の論理、眼はあっても、殺される側の論理、眼が欠如しているところに、この小説の残酷行為描破の特徴があることをここで強く指摘しておく。

それがために、既述のごとくこの作品は戦意昂揚に効果はあっても戦意喪失には決してならない、と私は再三主張するのである。

そして、とりもなおさずそうした相手、すなわち、「支那人」とのとが石川達三の視座になかったという一点にこそ、まさしく彼の人間性が露呈しているのではないか。

同じ時中国に従軍した尾崎士郎の最初のルポルタージュは、「悲風千里」（『中央公論』昭12・10）と題された。この題名からも内容と尾崎の姿勢、視点は推察できるが、これを評した大岡昇平は「むしろ征服された中国民衆に対する人間的同情の方が顕著である。」と述べているのは適切な評価である。^{注4}

尾崎士郎は、「支那事変」で「皇軍」兵士を格別に讃美もしなかったし、さりとて彼等の残酷ぶりを暴露することもしなかったが、尾崎の眼は敗残の跡をまわり、そこに「悲風」を見、「敗残兵の母」（『婦人公論』昭12・10）を見てきたのであった。石川達三が「生きてある兵隊」で点綴した日本軍の残酷行為の描写に照応する分だけ、尾崎の

「悲風千里」には「支那人」への同情と彼等の哀しみが占綴されている。

八木沼丈夫が作詞した軍歌「討匪行」（昭7）は、兵士に愛唱されながら「大東亜戦争」に歌うことを禁止されたという。その歌詞はこうなっている。^{注5}

どこまでつづくぬかるみぞ

三日二夜を食もなく

雨ふりしづく鉄兜

いなく声もたえ果てて

斃れし馬のたてがみを

かたみと今は別れ来ぬ

敵にはあれど遺骸に

花を手向けてねむごろに

興安嶺よいざさらば

いうまでもなく、最後の小節が軍部の忌憚にふれたのである。八木沼丈夫（明28〜昭19）は生涯の大部分を中国で暮し、その多くの期間を兵士として過ごした人である。この歌もそうした彼の実体験から生まれたことは改めて述べるまでもない。

尾崎士郎がこの八木沼丈夫をモデルとして小説「後雁」（『中央公

『論』昭15・10)を発表しているのは、この「支那事変」で視野にあつたものが、彼等二人に共通していたからであろう。それはまた、石川達三にはなかつたものでもある。

さて、管見では戦時中に「生きてゐる兵隊」にふれた唯一の文献と思われる宮本百合子の「昭和の十四年間」^{注6}で、つとに指摘され、戦後いちばやく「生きてゐる兵隊」^{注7}を発表した小田切秀雄も、その論考の副題を「戦争と知識人の一つの場合」としているとおろ、この小説の主題は「知性」あるいは「知識人」と「戦争」というところにあることは疑う余地はなからう。

したがって、たとえば岩上順一^{注8}のように、石川達三が「侵略戦争」の本質を掴んでいない点を非難したり、前述の「ヒューマニスティックな、健康な常識と社会正義の感覚から、作者はそのころの『表現の自由』の限界ぎりぎりまで抵抗していたのだ。」といった論法はいずれも的はずれと言つてさしつかえあるまい。

宮本百合はこの作品を正しくとらえて評している。

石川達三の小説が軍事的な意味から忌憚に触れたのもこの年の始めであつた。文学のこととしてみればその作品は当時の文学精神を強く支配し始めていた、いわゆる意欲的な創作意図の典型としてみられる性質の作品であつた。「蒼氓」をもって現われたこの作者は、その小説でまだ何人も試みなかつた「生きてゐる兵隊」を描き出そうとしたのであろうが、作品の現実はそれとは逆に如何にも文壇的野望とでもいふようなものの横溢したものと

つていた。作者はその一二年來文学及び一般の文化人の間で論議されながら時代的な混沌に陥つて思想的成長の出口を見失つていた知性の問題、科学性の問題、人間性の問題などを作品の意図的テーマとしてははっきりした計画のもとに携帯して現地へ赴いた。そこでの現実の見聞をもつて作品の細部を埋め、そのことであるリアリティを創り出しつつ、こちらから携帯して行つた諸問題を背負わせるにふさわしい人物を兵の中に捉え、全く觀念の側から人間を動かして、結論的にはそれらの觀念上の諸問題が人間の動物的な生存力の深みに吸込まれてしまうという過程を語っているであつた。

人間の問題を生活の現実の中から捉えず、觀念の中にみて、それで人間を支配しようとする傾向は、昭和初頭以後の文学に共通な一性格であるが、この作品には実に色濃くその特徴が滲み出していて、作者が自身の内面的モチーフなしに意図の上でだけ作品の世界を支配していく創作態度が目立っている。

プロレタリア文学側の作家として名高い宮本百合子の口から「人間の問題を生活の現実の中から捉えず、觀念の中にみて……」とか「作者が内面的モチーフなしに意図の上でだけ作品の世界を支配していく創作態度」とかいう批判が出るのは、かつて反プロレタリア文学作家が、プロレタリア作家を批判した際の常套文句であつたことを想起すると皮肉であるが、この指摘は全面的に共感できる。さらに、宮本も石川達三の「文壇的野望」を見抜いていることは、前述の板垣直子と

同様、核心をついた批評である。

石川達三はこの従軍体験で、結局「知性」や「知識人」の無力を体得し、そのことをこの小説で提示したのだが、彼もやはり、「知性」や「知識人」に対する先入観や期待を具備していたために、彼の観念的な「知性」や「知識人」像がチラチラ散見し、そうした兵隊が動いているばかりで、結果としては少しも「生きてゐる兵隊」は描かれなかったのは、当然であろう。

そのことがもつとも典型的に表現されている箇所を少し長いが次に引用してみる。引用箇所は第四章の終り（河出書房版・六〇〜六一頁）である。

笠原伍長にとって一人の敵兵を殺すことは一匹の鮒を殺すと同じであった。彼の殺戮は全く彼の感情を動かすことなしに行なわれた。ただ彼の感情を無慙にゆすぶるものは戦友に対するほとんど本能的な愛情であった。彼は実に見事な兵士であり、兵士そのものであった。彼には西沢大佐のように高邁な軍人精神はなかったが、平尾一等兵のように錯乱しがちなロマンティズムもなく、近藤医学士のように戸惑いしたインテリゼンスもなく、更に倉田少尉のような繊細な感情に自分の行動を邪魔されることもなかった。彼はどれほどの激戦にも、どれくらい殺戮にも堂々としてゆるがない心の安定をもっていた。要するに彼は戦場で役に立たない鋭敏な感受性も自己批判の知的教養も持ち合せてはいなかったのである。そうしてこの様に忠実な兵士こそ軍の要求している

人物であった。かつまた平尾一等兵や近藤一等兵たちも永い戦場生活のあいだには次第に笠原のような性格になって行くようでもあったし、ならずには居られないものであった。謂わば戦場へ来るまえから戦争に適した青年だった。

ここに登場するのが主人公の一群で、笠原伍長が農村出身の非「知識人」を代表し、平尾一等兵、近藤一等兵、倉田少尉が、それぞれ、新聞社員、医学士、小学校教師出身で、つまり「知識人」兵士となっている。この他にも、僧侶も出てきて、まことに都合のよい部隊編成が出来ている。宮本百合子ならずとも、その不自然性、観念的構成は一目瞭然である。

しかも、非「知識人」である笠原伍長は、一貫して、「全く彼の感情を動かすことなし」に殺戮を行う人間として設定されている。

彼は非「知識人」兵士のなかにも存在したであろう「錯乱しがちなロマンティズム」や、「戸惑いしたインテリゼンス」や「繊細な感情」については見ようとしなない。

この図式的類型的な観念性もさることながら、この彼の姿勢には許るがしたいものを感じる読者は少くはあまい。

実は、その点については小田切秀雄も着目しているが、彼の論考がさらに左記のところにまで延長されると、私は小田切の見解にも賛成しかねる。彼は前掲書で言っている。

描かれた知識人は作者の血をわけた人物でなくて、「錯乱しがち

なロマンティズム」や「戸惑いしたインテリゼンス」や「繊細な感情」などという作者の観念に従ってこしらえ上げられたものに過ぎぬ。だが、それらの観念に従ってこしらえ上げられた諸人物が、彼等の「戦場で役に立たない鋭敏な感受性や自己批判の知的教養」を次第に失って笠原のような型と化して行くとする時、近藤や平尾たちとは全く異なった、笠原の型へはどうしても近づいて行くことの出来ぬような別個の「鋭敏な感受性や自己批判の知的教養」が存し得たことを作者は遂に知ることができなかった。(中略)知識人的なものに思はされぬ一般の人々こそ強靱で知識人も険しい戦場で生きんがためには、結局笠原のようにならねばならぬのが現実だという「現実主義」的結論とこの美辞麗句的傾向の先には、通俗の実生活と新型の美辞麗句で飾り立てる「結婚の生態」が生れる。

小田切秀雄が、せっかく、非「知識人」兵士を笠原伍長のタイプに限定して描こうとする石川達三の態度を批判し、近藤や平尾たちを単なる「作者の観念に従ってこしらえ上げられた人物に過ぎぬ」と、正当な指摘をしておきながら、「笠原の型へはどうしても近づいて行くことの出来ぬ」ところの「知識人」兵士を想定したことによって、小田切と私の見解は分れる。

小田切秀雄がそういう兵士を想定する前提には、やはり「知識人」に対する特別な先入観が念頭にあってのことである。引用文の末尾にそれが端的に表明されている。

言い換えると、石川達三も小田切秀雄も、「知識人」に対して格別な期待と感情を内包している点で一致しているのである。

ただ、石川の場合は従軍体験によってそれを修正したのに比して、小田切の場合は相変らず幻想につかかれていたから、引用文後半のごとき批評となったと思われる。

その点、私はそうした意味の「知識人」幻想は持っていない。もし戦場において、「知識人」出身とそうでない兵士との間に、外面的にも内面的にも幾分かの異質なものの存在を認めるとしたら、決して知性的な発想からではなく本能的な発想からのずる賢しさがあるかないか、ということだけである。

まして、小田切秀雄が念頭に置いているような、反戦的「知性」や残酷さへの嫌悪感を、「知識人」特有のものだと私はいささかも考えない。

私の独断では、戦場では「知識人」も「ただの人」に還るはずである。

それがゆえに、「ただの人」は戦場のごとき異常な場面では、「一人の敵兵を殺すことは一匹の鮒を殺すと同じ」状態にもなるし、反対に「敵にはあれど遺骸に／花を手向けてねむごろに」といった哀切の情にうたれることもある。結局そうした自明の理を忘れているから、「生きてある兵隊」は実は生きていなくて死んでいるし、小田切秀雄の批評が途中で妥当性を欠いてしまったのである。

石川達三に、戦争における「知性」の問題を徹底的に追求する意図があったのなら、この作品に表現された安易な図式的方法をとらず、

むしろ、いったい近藤一等兵達をも巻き込む残酷性への不感性を惹起させているものは何か、ということについて迫まるべきであったのではないか。別な見方をすれば、戦争の迫力の前にはたちまち無力になつてしまふ「知性」とは何かを探求すべきではなかつたか。

いずれにしても、たかが従軍作家でありながら、文壇の野心から「戦争小説」を書こうとしたことが、そもそも失敗作となつた最大の原因であると断定しては言い過ぎであらうか。

なぜならば、彼は従軍したのであつて、兵士になつたのではない。たとえ砲弾煙雨のなかをくぐるがあつたとしても、それは偶然ないは意識的なことであつて、必然的なことではない。彼の生命の安全と行動の自由は無制限でないとはいへ、彼の手中にある。それに比して、実際の兵士は、生命の保証はむろんのこと、日常生活すべてが抱束されている。そういう境遇にある者の心中を去来し、脳裡に浮かぶものが何であるかは、全く逆の立場に居る者が切実に理解し、筆舌に尽すことは無理である。

そうした観点に立てば、石川達三の文壇的野心をあおつた先行の従軍報告は、眼前の戦争に圧倒され、素朴な感動を述べたにすぎず、決意の表明を吐露したにすぎないけれども、あくまでも従軍作家の位置からながめていられるだけに、実感がこもつていて、リアリティがある。なまじ妙な文壇意識や観念にとらわれていないから、単純ではあるがウツがないだけに「生きてゐる兵隊」より勝つてゐる。

「生きてゐる兵隊」の遺したものは、結論的に言えば、文学史的な面では、文壇筆禍事件史の一頁を飾つたことと、石川達三の個人的な

面では、鮮烈だつた彼の戦時下の活躍を一切免罪し、戦犯の仮指定を受けながら、その汚名を消滅させる最大の武器となつたことである。それ以外、何もなかつた。

三

石川達三の「支那事変」従軍行が、彼の文壇的野心を秘めたものであり、その結果が失敗に帰したのみならず、刑事処分を受けたとあれば、彼がただちにその失地を回復すべく全力を傾注したことは、彼の人柄からして不思議ではない。

彼は前述のとおり、裁判法廷においては居直りの論理で弁述を展開し、一方で恭順の意をその言動で示した。

失地を挽回する機会は意外と早く訪れた。

第一審の判決が出た直後、彼は再び『中央公論』の特派員として武漢作戦の従軍のさそいを受けたのである。この時も多くの従軍作家が現地に赴いたのであつた。ただし今回はいわゆる「ペン部隊」と言われる前述の内閣情報部の直接派遣であつた。二十余名の文学者が大挙して出かけた。もちろん、石川達三はそれとは別の従軍である。

この『中央公論』特派員前後の事情を、「結婚の生感」から写してみよう。

このときに當つてC雑誌社は前の失敗をとりかえし過ちを償う意味から再び私に従軍をすすめてくれたのである。

私は即座にこの計画に応じた。是非行きたい、何としても行きたい、これこそ私が名譽恢復の唯一の好機であると思った。

私はすぐに特派記者として行くことをC社と約束し、裁判事件の結果として従軍が可能であるならばすぐにも出発しようと決心した。

同書によれば、「九月十二日。快晴。午前八時。羽田飛行場」を出発したとある。かくして彼は一カ月余の滞在の後に帰国。「武漢作戦―戦史の一部として」を『中央公論』昭和十四年一月号に発表した。丹羽文雄の「還らぬ中隊」と併載であった。

石川達三は今度は用心深く、この作品の巻末には「目的とするとろはただ内地の人々に戦争の広さと深さ、戦争の複雑さを知って貰いたいことである、と「附記」することを忘れなかった。

この作品について既述の板垣直子は「スケールが総合的であって、形式が整っており、世の常のルポルタージュとは種類を異にし、逞しく勇猛な構成振りである。軍の作戦上の知識を与えてくれることもユニークである。」と評価している。

ところで、事変三年、昭和十四年になると、日本は武漢三鎮の攻略には成功したものの、戦局ははかばかしくなく、いっそう泥沼化した様相を呈してきた。しだいに軍部指導層も焦慮を見せ、文学者の間にも時代のただならぬことを認識し始め、国策文学団体もあちこちで創設される風潮となった。

そのはしりは、有馬頼寧農相の肝入りで発足した「農民文学懇話

会」である。昭和十三年九月に結成された。翌十四年になると、大陸従軍経験者を中心に、「文芸興亜会」が旗上げをした。二月のことである。新大陸の文化建設に協力しようというのがその目的であった。石川達三は同会の会則編纂委員となっている。

近衛文磨の再登場は、新体制運動の掛け声とともに多くの国民の期待になってのものだ。戦争の長期化にともない人々の間には「革新」と「新風」を望む声が高まり、局面の一新を待望する空気は日増しに増長され始めていた。そのため、近衛首相の「新体制運動」はたちまち各界各層で旋風をまきおこし、ただちに準備体制作りは着手された。

文壇とても例外でなく、文芸家協会も、時代の要請に即応すべく、十五年九月十五日、二十名の準備委員決定。石川達三もそのメンバーに加えられた。一カ月後にこれが「日本文芸会」と名付けられ、二十名の準備委員と八文学団体の代表が常任委員となっている。

やがてこの会が、「日本文学者会」となり、日本文学報国会となった過程と、同会がこの戦争でいかなる役割を果たしたかは、よく知られているとおりである。

日本文学報国会に至る国策文学団体結成、統合の出発当初から、石川達三はそれにかかわり、昭和二十年には、ついに実践部長の要職に就くという破格の「出世」ぶりを成しとげたのである。

つまり「生きてある兵隊」の筆禍の名譽回復は、「武漢作戦」執筆後には早くも果されていたばかりか、いつのまにか戦争文壇体制の枢要な位置をも占めていたのであった。

文壇の戦争体制協力は、国策団体の結成だけでなく、文芸統後運動と称する講演行脚も行うという徹底したものである。

文芸家協会主催、文芸春秋社と東京日日新聞社の後援で、第一回の第一班が昭和十五年五月六日、東海、近畿地方に出発したことによってそれはスタートを切った。全国各地を一グループ数人に分れて廻っている。この講演運動は、日本文学報国会の結成で主催者が同会に変わったが、昭和十七年末まで続いた。ここに参加した文学者は延べ二百余人である。石川達三の参加は四回。この回数は菊池寛、久米正雄のような幹部を別とすれば、多い方であるから、彼の熱意は肯首できよう。

周知のように日本文学報国会の創立は昭和十七年六月。早速彼は小説部会の幹事となった。

もっとも昭和十六年末、「大東亜戦争」の開戦直前、例の報道班員として徴用され、海軍報道班員として半年間南方に出征している。この幹事就任の決定の過程に彼が直接たずさわったかどうかは不明である。

海軍といえば、十返肇の、『現代文壇人群像』（六月社、昭13・6）には、石川達三は「戦時中海軍省のシヨクタクみたいになっていた」とも書いてある。

文学報国会は、『文芸年鑑』その他の記録をみると、文学報国大会報道班員慰労会、大東亜文学者会などを催し、かなり積極的な活動を展開していたことが推察できるが、これ等の会合には石川達三も出席し、意欲的な発言をしていたことが報じられている。

もちろん、石川達三はこのように各種団体の役員を歴任したり、講演に出かけたり、大会で発言するといった、際だった行動をとって、表面的な活発さを見せただけではない。

小説家としての石川は、本業である文筆活動においても、その主張と発言がそれにふさわしいものであったのはいうまでもない。

昭和十四年十二月号『中央公論』の火野葦平との対談で、話が国策文学のことに及び、記者が「石川氏も若し軍籍になれば、やはり国策遂行の爲にもっと直接的に書くという気持になるだろうね。」と質問にしたのに応えて「それはある。軍籍に居ないでもいく分かあるよ」と言っている。この時点では「いく分かある」と、少しはひかえめである。

しかしやがて戦争の時代は深まり、「大東亜戦争」の開戦前後になると、「兎もかくもこの歴史的に大きな日々を生きて居りながら、自分の仕事に直接に時代と関連して生きるものが無いとすれば、むしろしばらく文学を休業した方がいいとさえ、私は思うのだ。自分の作品が国家に一つの富を加え、この時代に必要な富となるのだという自信が無くては作品を書くとする情熱が湧いて来まい。」（『文芸』昭17・1）と「国富としての文学」を訴えるようにまで積極的となる。だが、まだ、「文学を功利的に考えることには異論は多いわけだが、この時代の文学の発展に必要なことは、精密な文学理論ではなくて、むしろ形はととのわなくとも実践にあると私は大きっぱに考える。」と「文学を功利的に考える」ことへの多少の躊躇が見られなくもない。ところが、さらに時代が進み、緒戦の勝利もつかのま、戦局が日本

にとつてますます不利になってくるにつれて、この躊躇は消滅する。昭和十八年十二月号『文芸』の「実践の場合」では、もはやそうした考えは影も形もなくなっている。

日本軍の敗色は色濃くなり、激戦各地での玉砕や撤退の報が内地にも届いていた頃である。

「極端に言うならば私は、小説というものがすべて国家の宣伝機関となり政府のお先棒をかつぐことになっても構わないと思う。そういう小説は芸術ではないと言われるかも知れない。しかし芸術は第二次的問題だ。先づ何を如何に書くかという問題であつて、いかに巧みにいかにリアルに書くかという事はその次の考慮である。私たちが宣伝小説家になることに悲しみを感ずる必要はないと思う。宣伝に徹すればいいのだ。宣伝に徹すればそこに別の芸術を発見し得るに違いない。その芸術が大正昭和の文学芸術と比較して低いということは言えない筈だ。たとい低くかたにして、低いことを恥じる必要もない。私達は生涯をその宣伝芸術に托しその部署を守つて闘える筈だと思う。

宣伝文学とか時局小説とか、嘲笑的な意味を含めた肩書きは、作家の不徹底を意味するものである。

ここまで言い切つてしまえば、もはや後に続く言葉がない。

昭和十九年、すでに敗戦は決定的であり、国民の目にもそれは明らかになつてきた。岩波書店版『近代日本総合年表』には、この年「戦

況に関する流言、激増」と出ており、「食糧欠乏で、のら犬、野性化東京都、野犬買上げ」と記されている。荒廢した戦争末期の状況が目につかんでくる。

「竹槍ではまに合わぬ。飛行機だ、海用航空機だ」の記事を書いた『毎日新聞』の新名丈夫記者とそれを載せた『毎日新聞』が、東条首相の激怒をかい、責任者の処分と記者の懲罰召集を受けるという「事件」が起きたのも、この年の二月二十三日付の新聞記事に端を発したものである。この「事件」には陸軍と海軍の確執が背後にあつて、指導層の統一も乱れが目立っていることを露呈した。

雑誌の統廃合も強行され、総合雑誌は『公論』と『現代』の二誌となった。七月、『改造』と『中央公論』に自発的廃業の要請が通告された。新聞もすでに統廃刊はすすんでいたが、三月には夕刊も廃止となつている。

人心の混乱が極に達するのは、七月頃であろうか。先述の「流言の激増」の記述は、七月十六日の『朝日新聞』からである。

こうした戦局の悪化と人心の動向のなかで、さしも東条首相も辞職を余儀なくされ、七月十八日ついに内閣は崩壊した。

憂國の士、石川達三がこの事態を黙過するはずもなく、「生きてゐる兵隊」で銃後国民に警告し、「実践の場合」で文学者を挑発した彼はここに至つて政府・当局を恫喝する。

「言論を活発に――明るい批判に民意の高揚」（『毎日新聞』19・7・14）、「作家は直言すべし」（『文学報国』三二号、19・8・1）「言論暢達の道」（『文芸春秋』19・12）などの発言によって、「もはや一

刻を争う。当局者の英断と急速なる処置とを希望したのであった。まこと彼の勇断と熱情は讃えられるべきであらう。

興亡の岐路に立つ今日国民の戦意必ずしも高揚していない事について、当局はしばしば嘆声をもらしているようである。国民の戦意は最大限度まで高揚されなくてはならないが、高揚せざる原因は何であるかを究明しなくては成果は挙らない。その原因の一つは日常生活の不自由であることは明瞭であるが、他の重要な原因の一つに言論の萎微沈滞をあげなくてはならない。殊に知識階級の戦意不振、道義心低下の原因はそこにある。(略) 言論を抑圧すれば民衆は反抗し反抗を弾圧すれば民心は沈滞する。今日、言論関係における人心の沈滞こそは銃後の戦意高揚せざる大きな原因である。抑圧された言論は流言となり、飛語となる。明朗性を失った陰の言論は思想の根を蝕む。(略) 先づ言論を活発化して民衆に声を与えよ。彼等の言論は決して事態を混乱に導くものでもなく、当局に反抗するものでもあり得ない。しかも民衆の言論は相互に是正しあって必ずや今日の道義心の低下を救い、国民総蹶起に資するところ少なからざるを信するのである。

(「言論を活発に」)

言論の危険さは、現状を論じて将来を憂え、将来を論じて現状を憂ふる、すなわち現実社会より一步先を考えているところにある故に言論の取締りと指導とは戦時に於て特に必要である。指導の

目標は国論の統一と強化とである。戦意昂揚も一億総蹶起も、かくの如き国論統一と強化とによって結果されるものであって、戦意昂揚をいかに宣伝して見ても言論が萎縮して居ては単なる宣伝に終ってしまふ。今日まで国論統一のために、戦意昂揚のために宣伝された標語は如何に多種多様であったか。しかしこれらの宣伝が単なる宣伝に終ってはいなかったか。(略) 言論と言論機関は今や最も俊英なる憂国者をもって充たされている筈である。かかる状勢を助長し、言論を活発化してこそ真の戦意昂揚は成り、真の総力戦はととのえられるのである。この国民を信頼せよ。

(「言論の暢達の道」)

一読して明白のとおり、たといこの発言の直接の動機が久保田正文の言うように「二つの言論機関(註・中央公論と改造)がつぶされたことに対する時をおかぬ、そして直接の反応であった」としても「もちろん、これらのことばにしても『戦意昂揚』を看板にしつつ、かなり明らかに面従腹背の調子を残している。」^{注9}ものでは決してあるまい。

「中央公論社、改造社に対する弾圧へのプロテストがモティーフとなったものであることはまちがいないかろうが、紙面(『文学報国』)にあらわれたかぎりではたどってみると、この時期を通じて私は石川達三の言動が、一種爽快な歯切れのよさをもつてうかがひあがってくる」と^{注10}言う久保田正文の想定するような「一種爽快な歯切れのよさ」は、私にはうかがひあがってこない。

「現下国内の最大難関は民衆の道義心の低下である。」（「作家は直言すべし」）ことを嘆く石川達三が、それを招来した「政治当局の非才無力」と「国内宣伝の拙劣」（同前）を糾弾したのであって、一億総蹶起の戦意昂揚を熱望する烈々たる石川達三の相貌が、あの「生きてゐる兵隊」裁判の陳述のときの居直りと倨傲の風貌とともに私にはうかがひあがってくるのみである。

おそらくかような「傲」と彼の憂国の情が通じたのであろうか、翌二十年一月には、文学報国会の実践部長の座を得て、文学者の動員面の責任者の位置に就いたことはすでに述べた。

時に石川達三、四十才。必ずしも若くはないが、文壇デビニューが昭和十年の第一回芥川賞受賞の三十一才であることを思えば、「生きてゐる兵隊」のつまづきを克服し、文壇生活十年にして、この地位を得た彼の時代認識のたしかさは、やはり目を見張るものがあろう。

四

昭和二十年八月十五日、この日を境にして日本の政情は一変し、さも台頭してはばかるところのなかった軍部権力もついに互解し、「鬼畜米英」と罵倒した当のアメリカ占領軍が新しい権力者となる。

しかも実質的な権力者は、「大東亜戦争」緒戦において、フィリッピンから追い出したマツカーサー元帥であったのは皮肉である。彼は今、戦勝国の最高司令官として、日本にやってきたのである。敗戦の日から十余日、八月三十日に厚木飛行場に到着し、ただちに占領政策

断行に着手した。それは基本的には、旧日本軍事体制の懐滅とアメリカ型民主体制の導入を企図したことはよく知られていよう。

一般庶民にとっては、敗戦の哀しみと、戦争からの解放と眼前の食糧、物資不足とまさに身心ともに混乱を極めた時代である。

そして、「同盟通信」編集部同誌「進駐軍は何をする」（昭20・8）のなかで「上陸軍が来たら何をするかも知れない、—こうした風説が飛んですくなくならず人心が動揺し……われわれとしては、こんな流言飛語に不安や焦燥を感ずることなく、上陸軍は進駐後何をするかということも一応心得ておき、毅然として日本の再建のために進みたいものだ。」（安田武他編『昭和二十年八月十五日』）新人物往來社、昭48・8所収）と懇切に解説していることから推考できるとおり、進駐軍に対する「国民の不安と焦燥」もまた隠せないのが、当時の一つの現象であった。

この戦いに敗けたならば、鬼畜米英が何をするかわからない、といって国民を煽動してきただけに、それが現実となつたいま、国民の不安と焦燥が増し、流言飛語が飛びかうのも無理からぬことである。

なかならず、戦争犯罪者の処断は確実に予想されることであつたから、職業軍人や政府最高指導層はともかく、それ以外のとりわけ言論知識人にとっては、経験もなく予測つきかねたために、その動揺や不安は想像を絶したにちがいない。

だからこそ、彼等の多くはいちはやく「民主主義」を鼓吹し「軍国主義」を呪詛し、戦時中の自己のアリバイ証明に奔走したのである。もちろん、機をみるに敏なることで人後に落ちない石川達三は、戦

時体制下の花々しかった活躍の足跡を懐しがり、敗残の哀しみに打ちひしがれるバカな真似はしなかった。

尾崎士郎の敗戦日記『謫居随筆』（酣灯社、昭22・10）の二十年九月十八日の項に、「石川（達三）君と言えば、彼はすでに民主日本の指導に任じて、大いに張り切っているようだ。それはそれでいいとしても、何かの新聞に、文化方面の責任者を挙げるとすれば、先ず尾崎君、それから誰々というようなことを書いていたようだ」と出ているその新聞は確認していないが、九月十八日の日記に伝聞体で書いてあるところから考察すれば、敗戦の報から一カ月も経たぬうちに、石川達三は時代の方向を洞察し、それに見あつた対処をしていたことになる。全く彼の卓抜した時代の察知力にはおどろかされる。

実際、彼は十月一日に発足した「自由懇話会」の発起人に名を連ね同じ日「日本再建の為に」を新聞に寄稿している。

私はマッカーサー司令官が日本改造のために最も手厳しい手段を採られんことを願う。明年行われるところの総選挙が、もしも旧態依然たる代議士を選出するに止るような場合には、直ちに選挙のやり直をしを厳命して貰いたい。もしも官僕が因循と墮落との旧態を改めざるにおいては、内務省機構の全的解散と再組織とを命令して貰いたい。官僚に対してかくばかり澎湃たる国民怨嗟の声がありながらなお一片の改革を為し得ぬ現状を以てすれば、進駐軍総司令官の絶対命令こそ日本再建のための唯一の希望であるのだ。何たる恥辱であろう！自ら改革さえもなし得ぬこの醜態

こそ日本を六等国に転落せしめた。今はこの恥辱を骨身にしみ味はふべき時だ。それが日本を甦生せしめる力になるだろう。

私の所論は日本人に対する痛切な憎悪と不信とから出発している。不良化した自分の子を鞭でもって打ち握る親の心と解して貰いたい。涙を振ってこの子を感化院へ入れるように、今は日本をマッカーサー司令官の手に託して、叩き直して貰わなければならぬのだ。しかし私は希望をもっている。むしろ卒直に言うならば今日ほど明るい気持をもった事はなかったと考える。

日本はいつ本場に再起できるのか。甘い気持を捨てて真剣に考えてみようではないか。

右の文章は、昭和二十年十月一日付の『毎日新聞』に発表されたものである。

駄足ながら「明年行われるところの総選挙」に、石川達三自ら立候補して落選している。

福島鏗郎編者の精密な著作『戦後雑誌発掘』（日本エディタースクール出版部、昭47・8）には、敗戦直後の創、復刊の雑誌が丹念に調査され報告してある。

それによると、「特集、新日本建設の途—平和進駐」（『時局情報』20・10）、「特集、明日の祖国に寄す—ひとつの覚悟」（『文化』20・12）、「一家創立」（『太平』20・12）が掲載の目次に見られ、『女性』（12・1）、「婦人文庫」（21・2）などの誌面もかぎったという。いずれも創刊号についてのことである。石川達三の意気込みと、もては

やされ方が想像できるのではないか。

しかし、なんといっても彼の自己照明とアリバイ証明の白眉は『生きてゐる兵隊』の公刊であろう。昭和二十年十二月二十日、河出書房から発行された。奥付には五万部印刷と記してある。

おりから非転向出獄共産党員をむかえて、共産党は再建され、十二月八日には神田共立講堂で戦争責任追及大会が開催されていた。

連合軍によるA級戦犯三十九人の逮捕はすでに九月十一日に始まり戦犯逮捕の報道は連日新聞に発表されるありさまであった。

彼の出版が何を期待したものであるかは、いまさら論及するに及ぶまい。

ただ、こういう風潮のなかでは、共産党員の「抵抗」に比すれば、問題にならず、かえって岩上順一には前述のごとく、「侵略戦争」をむしろ推進したと非難され、石川達三が居直って、彼を逆襲し、^{注11}思わす本音を出しかける喜劇が演じられたことだけは、ここにつけ加えておこう。

いずれにしても「戦犯」のラク印がまさか自分のところにまで押されることはあるまい、とタカをくくっていたことは十分予測できる。

ただ、万一のことを慮って、マッカーサーにも着任早々礼をつくり、「民主主義」者たるを表明すべく「自由懇話会」の設立発起人にもなり、総選挙にまで立候補したのである。新生民日本を標榜するあちこちの雑誌にも寄稿して、十分、自分の態度を表明してきた。誰が何といおうと、「生きてゐる兵隊」の筆禍事件という「抵抗」の証しがある。

そういう彼のところへ、「戦犯」指定もあら方終った昭和二十三年三月の暮に、ついに恐れていたものが届いたのであった。彼の狼狽が彷彿としてくるではないか。

しかし、幸いにもこの通知をよく読むと、これは「仮指定」であり三十日以内に異議申立を申請して、それが認知されれば、この「指定」は取り消されることになっていた。

手許に資料がないので、彼がいかなる画策を奔し、どのような文面で異議を唱えたかは定かでないが、五月十五日付の『読売新聞』は、岩田豊雄、丹羽文雄、木村毅と石川達三の非該当を伝えている。

「生きてゐる兵隊」は軍部の怒りにふれて発禁処分となった。該当書『武漢作戦』も当局の厳しい監視と弾圧の下に執筆つづけたもので、その内容は必ずしも軍国主義を謳歌したものではない。

念のために、「戦犯」該当文学者の作品のいずれも、戦争や戦場を素材にしたり、国家民族の危機を訴えるのはあっても、「必ずしも軍国主義を謳歌したのではない。」ことは附記しておく。

注1 西村孝次『現代日本文学全集・48』解説(筑摩書房、昭30・11)

注2 「生きてゐる兵隊」と「細雪」をめぐる(『文学』昭36・12)

注3 『石川達三論』(永田書房、昭47・3)所収文より引用。

注4 『昭和戦争文学全集・2』解説(小学館、昭39・9)

注5 『八木沼丈夫歌集』(新星書房、昭44・5)

注6 『日本文学入門』(日本評論社、昭15・8)

注7 『新日本文学』（昭21・3）△『人間と文学』、河出書房、昭21・8
所収、引用はこれによる√。

注8 『文学会議』三号（昭22・4）

注9 『新選現代日本文学全集・石川達三集』解説
（筑摩書房、昭34・7）

注10 『文学報国』をよむ『文学』、昭36・12

注11 「時代の認識と反省」『風雪』、昭22・5

（この論者は『淑徳国文』十六号の拙稿「戦時体制下の文学者」の
続編をなすものである。）